

釈文の訂正と追加（一〇）

秋田・秋田城跡（第一・八・一二号） あきたじょう

1 所在地 秋田市寺内字鶴ノ木

2 調査期間 一 第二五次調査 一九七八年（昭53）七月～一

二月、二 第三九次調査 一九八四年四月～七月、

三 第五四次調査 一九八九年（平1）四月～一

二月

3 発掘機関 秋田市教育委員会秋田城跡調査事務所

4 調査担当者 一 小松正夫、二 小松正夫・日野 久

三 小松正夫・日野 久・松下秀博・西谷 隆

5 遺跡の種類 城柵官衙跡

6 遺跡の年代 奈良時代・平安時代

7 木簡の釈文・内容

秋田城跡出土の木簡については、本誌第一・八・一二号で報告したが、第一二号で報告した第五四次調査分、すなわち外郭東門西南の湿地SG一〇三二のスクモ層から出土した木簡については、整

理・解読の途上で四点について報告したにとどまっていた。その後、第五四次調査出土木簡は二九六点に及ぶことが判明し、その全貌は『秋田城出土文字資料集Ⅱ』（秋田城跡調査事務所研究紀要Ⅱ、一九九二年）において報告した。また、『秋田市史』第七巻古代資料編（二〇〇一年）などで一部の釈文の訂正を行なっている。本誌においてもこれらの成果の一端を紹介したいというのが、今回の追加紹介の意図の一つである。

また、木簡の科学的保存処理の前後における再検討や、今般編集が進められている『青森県史』資料編古代二による東北地方出土文字資料データの収集過程における再検討によっても、新たな釈読成果を得ることができたため、釈文の新たな訂正が必要となった。

そこで、今回、本誌既紹介の木簡の釈文訂正と、『秋田城出土文字資料集Ⅱ』で報告した木簡のうち主要なもの追加、という形で、秋田城跡出土木簡の紹介を行なうこととした。『秋田城出土文字資料集Ⅱ』所収の釈文の訂正を要する木簡はすべて紹介することとし、秋田城跡出土木簡番号の後ろに※を付して明示した。

なお、その際、法量の訂正や釈読できない文字数の変更など、軽

従来の釈文を尊重し、できるだけ釈読を後退させないようにし、訂正は原則として、①従来釈読できなかった文字を釈読できる（可能性も含む）場合、②従来の釈読に替わる（可能性も含む）代案を提示できる場合、に限ることとした。

井戸SE四〇六

(1) 下野国河内郡 部郷 〔財力〕

天王御為
大國王御為五
若國
〔王御為力〕
父母二柱御為五百
過去現在眷屬御為五〇

〔柱御為力〕
百

菩薩

天平勝寶四年七月廿五日

〔縁力〕☐
〔縁力〕☐
〔縁力〕☐
〔現力〕☐

664×(35)×11 081 第四・五号※ 1(5)(6)

第四号、第五号として報告されたものが、上下に接続。六五cmを

超える長大な木簡であることがわかった。右辺割れ。読誦の回数を記した転読札の類とみられるが、国郡郷名から書き出すこととの関係は明らかでない。天平勝宝四年は七五二年。

SG四六三

(1)

[<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>		[加力]	[<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>]	[離力]	[<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>]	[律令力]
[<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>	(符籙)	[<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>			如	


(340)×31×5 019
第八号 ※ (8)


二 第三九次調査

上端は山形に尖らせる。下端は折れ。長大な呪符木簡で、末尾部分「急々如律令」であろう。

三 第五四次調査

S G I O I I

- (1) 
 > 延暦十年四月廿二日
 (143)×25×5 032 第六一号※ 12(4)
- (2) ・「八月廿五日下午狄饗料□二条□
 「 □ 田川 荒木真
 (225)×26×3 019 第七一号※
- (3) ・「主粮返抄
 □
 (73)×35×3 019 第二八号
- (4) ・「謹解 申請殿門酒事 合二匠丁
 「 延暦十三年三月廿五日下午毛野岡人」
 465×40×3 051 第六六号※
- (5) ・「解 申進上物事 合鯛拾四隻」
 「右件便附使進上如件」 205×21×1 011 第七〇号

- (6) 「一番長解
 (92)×(12)×2 081 第一〇三号
- (7) 「三番財部□君万呂
 四番□部馬弓
 (175)×(39)×2.5 081 第一八五号
- (8) ・「上野国解 申進□□□
 「五月□
 (239)×(18)×4 081 第五〇号
- (9) 「上野国進鎮
 (80)×(21)×3.5 081 第二五号
- (10) 「上総国部領解 申宿直
 合五人 火×
 (109)×40×4 019 第二二号
- (11) ・ 申進上御門宿
 火長刑部
 (228)×(27)×5 081 第一〇四号
- (12) ・×直事 合三人 火長□田□□□
 子 家力 長
 (208)×(20)×3 081 第一〇五号

- (13) ・「火長他田マ糧万呂 物マ子宅主 大伴マ真秋山 長門マ□万呂 大伴マ真古万呂 尾治マ子徳□万呂
矢田マ子酒万呂 神人マ福万呂 三村マ子舊人 小長谷マ犬万呂」
三月十五日
505×33×7 011 第一六号※
- (14) ・火長矢田マ宅磨 他田マ□〔稲カ〕
他田マ真京 〔他田カ〕
〔延カ〕
□□年三月九日 (177)×27×5 081 第一〇六号
- (15) ・「火頭公子真酒万呂 合 丈部廣山 三村部子藪 日陽マ青楊」
・「小長谷マ大町 公子福善 生マ家成 一鬼甘犬甘 以正月四日 □長千相」
生マ手子万呂 三村マ真藪 〔郷カ〕
283×28×5 011 第一七号※
- (16) 〔稲カ〕
□□本五人
「大殿」九人十八人 八木五人 (133)×43×5 019 第一九号
- (17) ・儀マ 〔三波〕
物マ□
〔主カ〕
□日□□ (248)×30×5 019 第三五号※
- (18) ・「子代長□ 丈人□
千□万呂 師、子当成
〔男カ〕 家万呂
子□□□ 〔神カ〕
□□合× (118)×53×3 019 第三三三号※
- (19) 〔合〕
□□真□□〔合〕
尾張部真鳥〔合〕
土師マ真尼万呂〔合合〕
三刀部総足 廣成
〔合〕
尾×
嶋×
(140)×47×5 065 第一一〇号※
- (20) □□ 〔大伴若万呂〕
□□ 〔上□□〕〔里カ〕
□食万呂 〔丁カ〕〔食カ〕
□神人□万呂 火長己足 神人倉下吉
□丁カ 他田粟万呂 生マ万潤 丈マ乙岡□□〔屋カ〕
□□万呂 丈マ乙岡□□〔屋カ〕
□□馬弓 〔上□マ万□□〕
(396)×(46)×3 081 第八〇号※

(21) ・「子太^{〔肥力〕}一升夜^{〔和力〕}矢一升、伊佐伎一升、鎔取一升、伊波^{〔一升〕}」

「伊佐伎三升真紀^{〔二升〕}子^{〔一升〕}手^{〔二升〕}」

413×33×6 011 第一八号

(22) ・鳥百五十

(26) ・子得員千二百

子淨足百五十
若公百五十

〔目佐力〕
万呂百五十
羊百五十

公足百五十

〔万呂百五十力〕

(27) ・「上野国緑^{〔一斗〕}足^{〔一斗〕}」

(112)×(17)×2.5 081 第二七号※

米五石代

220×21×13 051 第七四号

百五十
百五十

〔万呂百五十力〕

(120)×32×3.5 019 第三四号※

(28) ・「最上郡糯^{〔一斗〕}主^{〔一斗〕}」

「延曆十三年五月十九日丸子^{〔一斗〕}」

173×18×4 051 第六九号

(23) ・真^{〔采力〕}万呂^{〔百力〕}五十

身万呂
百五十
百五十

子^{〔万呂〕}
廣成

(29) ・「平鹿郡糯五斗延曆十一年^{〔一斗〕}月廿六日

書生丈マ

(204)×23×4.5 051 第七五号

(24) ・「四卷役病行

五^{〔卷力〕}

〔高泉水力〕

・「奉鳥取部雄足

(85)×(29)×2 081 第一〇二号※

(25) 掃守^{〔一斗〕}乙乃子^{〔一斗〕}

(203)×(14)×1.1 081 第一三三号※

(30) ・「糯^{〔郡力〕}五斗^{〔挟抄檜前力〕}

「延曆十二年^{〔一斗〕}月廿一日^{〔一斗〕}長

(127)×23×4 033 第五六号※

- (31) ・「壬生虫万呂春米糯五斗
 ・「 $\square\square\square$ 」年五月十日 (148)×21×2 019 第七号
- (32) ・「＜三国浄万呂調米五×
 ・「＜ 三月九日 (128)×25×4 033 第六四号
- (33) 「 $\square\square\square$ 」物マ $\square\square$ 倉調米五斗 091 第一一八号※
- (34) 「廣面郷公子並神調九斗 (185)×(22)×1 081 第一七号※
- (35) 「大田郷石マ $\square\square$ 安女」 154×21×3 051 第七七号※
- (36) ・「＜山方郷大伴部白麻呂上 $\square\square\square$ 石」
 ・「＜ 奉神
 「 $\square\square\square$ 九 $\square\square$ 五月」 317×35×10 032 第五一号※
- (37) ・「＜吉弥侯里秦根二斗五×
 ・「＜ 三月廿七日 (134)×20×4 033 第五一号※
- (38) ・「＜上稻」
 ・「＜酒見公 $\square\square$ 繼」^{〔豊カ〕} 166×22×3.5 033 第五三号※
- (39) 「 $\square\square\square$ 」延暦十四× 195×22×5.5 065 第六五号
- (40) 「伊 $\square\square$ 社大伴マ龍万呂」^{〔奈カ〕} 175×18×5 051 第七六号
- (41) 「枚人」 147×20×5 051 第七八号※
- (42) ・「 $\square\square\square$ 。 $\square\square\square$ 。丙寅。丁卯。戊辰。 $\square\square\square$ 。庚 $\square\square\square$ 。壬 $\square\square\square$ 。酉。」
 ・「 $\square\square\square$ 。乙 $\square\square\square$ 。子。 $\square\square\square$ 。己 $\square\square\square$ 。庚 $\square\square\square$ 。辛巳。壬午。癸未」
 ・「 $\square\square\square$ 。丙戌。丁 $\square\square\square$ 。子。己丑。庚寅。辛卯。壬辰。 $\square\square\square$ 」
 ・「 $\square\square$ 午 乙未 丙申 丁酉 戊戌 己亥 庚子 $\square\square$ 壬寅 癸 $\square\square$ 」
 ・「 $\square\square$ 乙 $\square\square$ 午 丁未 戊申 $\square\square$ 癸 $\square\square$ 」
 ・「 $\square\square$ 卯 $\square\square$ 己未 庚申 $\square\square$ 西 壬戌」
 ・「 $\square\square$ 戊辰 $\square\square$ 庚 $\square\square$ 壬申 $\square\square$ 酉」

- (43) □□□□山主 (112)×(9)×6 081 第三八号※
- (44) ・長大生小常
刀万呂 (119)×24×4 019 第三九号
- (45) ・□田マ子諸忍□
□□ (132)×(29)×5.5 081 第七三号※
- (46) 「鷹取」
310×27×1 061 第八五号
- (47) 「引□□」^{〔六カ〕}
(90)×12×2 081 第八七号※
- (48) □□ 王生マ□□吉 291×30×7 065 第八九号※
- (49) ・□□□申□□□□請□□不□□^{〔所カ〕}
□□□□ (280)×(7)×4 081 第九七号※
- (50) 「□道無無無無阿□□」
(156)×24×3 081 第一七四号※
- (51) □□□□□□□□ 163×(32)×3 081 第一七四号※

- (52) □□
波流奈礼波伊万志□□□□□□ (181)×20×6 081 第一七九号※
- (53) □所□子津□□田川郡 091 第一八六号
- (54) 置賜□□^{〔郡カ〕} 091 第二〇〇号
- (55) 奉神 丈マ多万呂□□△□□ 091 第二〇二号
- (56) 右米□ 091 第二一九号※
- (57) □□
国府府寺□□ 091 第二三六号※

(1)は、上端は切り込み部分で折れ。また、表面は上半を中心に削り取られており、釈読できない。延暦一〇年は七九一年。年紀を月日まで記すものには、28、30など糯の事例があり、これも糯の荷札か。

(2)は、下端折れ。左辺上部に焼痕がある。蝦夷に対する饗食のために、物品を下付したことを示す木簡。品目名の「□」は草冠に「田」「八」「土」を重ねる字体。「藁」または「藁」の異体字である「縊」か。条は細長い物を数える単位であり、「かずら」の意であろう。「田川」は出羽国田川郡か。(3)は、下端折れ。返抄木簡の

上端。「主糧」は糧物を担当する官職か。(4)は、下端を左右から削り出して緩く尖らせる。表面の「二匠丁」は不詳。「二缶一斗」の可能性もあるか。但し、「缶」の最終画を之繞風に書く字形は類例を見ない。延暦一三年は七九四年。(5)は、上端は山形、下端は方頭を呈する。鯛の進上木簡。

(6)は、下端折れ、左辺割れ。鎮兵あるいは兵士の番長の解の断片。(7)は、下端折れ、左右両辺割れ。「三番」「四番」と見え、(6)と同じく上番に関わる木簡か。

(8)は、下端折れ、右辺割れ。(9)は、下端折れ、左辺割れ。(8)(9)ともに上野国からの解。いずれも鎮兵ないしその糧物の進上木簡であろう。

(10)～(12)は宿直木簡。(10)は、下端折れ。上総国部領(使)の解の様式による同国鎮兵の宿直木簡。「部」は偏を大幅に省画し、「マ」に近い字形をとる。(11)は、上端は櫛状に割りを入れる。下端は折れ。文字の残り具合からみて、左右両辺も原形をとどめない。門の宿直を報告する木簡。(12)は、上下両端折れ。文字の残り具合からみて、左右両辺も原形をとどめないか。

(13)～(23)は歴名木簡。(13)は、軍団の火長以下一〇名を列記した完形の歴名木簡。物部子宅主は第一〇八号木簡にも見え、また、第二〇六号木簡には大伴部真秋山と思われる「真秋山」が見える。(14)は、下端焼損。上端も原形をとどめないか。あるいは宿直木簡か。(15)は、

賦役令役丁匠条に基づいて構成された、火頭及び丁匠と思われる一〇名の人名を列記した完形の歴名木簡。(16)は、上端折れ。「九」は「凡」の可能性もある。「稲本」「八木」は人名とみられるので、「凡人十八人」の方が「人名十人数」という記載の整合性が高くなる。「大殿」は殿舎の尊称。木簡作成部署ごとに大殿があつてもよいが、ここではむしろ秋田城全体の大殿、すなわち政庁を指す可能性が高いか。(17)は、上端折れ。表面には人名を列記、裏面には日付と人名が書かれる。

(18)～(23)は帳簿様の歴名木簡。(18)は下端折れ。比較的幅の広い帳簿様の歴名木簡。一部に合点を付す。裏面の「神」の次の文字は、「出」または「上」の可能性がある。(19)は、下端折れ。木簡を二次的に整形し、何らかの木製品に転用したもの。右辺は上に向かって細く削っている。(20)は、上端折れ。下端は円弧状を呈する。右辺割れ。あるいは折敷の底板などを転用したものか。六段にわたる人名が残る歴名木簡。一部に合点が付される。一部の人名の末尾に見られる「戸主」は合わせ文字。(21)は、人名と数量を列記した長大な帳簿状の歴名木簡。一部に合点が付されている。(22)(23)は、「(人名) + 百五十」を列記する帳簿状の歴名木簡。(22)は上端折れ。(23)は、上下両端二次的切断。左右割れか。

(24)は、上下両端折れ、左辺割れ。經典の読誦に関する巻数に相当する木簡と考えられる。「役病行」「高泉水」は、行配りから考えて

もその上の「く巻」の註記ではなく、横に連なる連続した記載とみるべきであろう。なお、「巻」は従来いずれも「番」と釈読してきたもの。

(25)は、上下両端折れ。右辺二次的削りか。(26)は、上下両端折れ。左右割れか。(27)は、下端は左右から削って尖らせる。右辺も文字の一部を欠いており、二次的整形か。「上野国緑□□」は上野国緑野郡のことと思われるが、残画から「野郡」を読み取るのは困難。

(28)は、郡を単位とする櫛の荷札。(28)は上端は山形。下端は尖頭状に作る。出羽国最上郡の櫛の荷札。(29)は、下端を尖頭状に作る。出羽国平鹿郡の櫛の荷札。延暦十一年は七九二年。(30)は、下端折れ。表面三文字目は従来「郷」と読まれてきたが、「郡」と釈読でき、また裏面にも新たに年紀が確認され、(28)(29)と同様の荷札であることが明らかになった。表面の「挾抄櫛前」は、かじとりの櫛前の意か。「櫛」は木偏に「色」を書く異体字。征夷のために坂東諸国に櫛を準備させたことは、『続日本紀』延暦九年(七九〇)閏三月乙未条と同延暦一〇年十一月己未条に見える。これらは当事国陸奥・出羽における準備を前提にした施策だったのであろう。

(31)は、左辺上部は割れて欠損。下端折れ。左辺上部に焼痕あり。「春米櫛」は他に見えない。櫛は炊いた米を乾燥させたもので、敢えて「春米」を付した理由は不詳。春米として管理していたものを

櫛に加工したことを特に表現するためか。あるいは、櫛の荷札の類例(28)～(30)が基本的に郡単位の貢進書式をとることからすると、個人単位の貢進書式をとるこの荷札は、櫛加工用の春米の荷札ということもあり得るか。

(32)は調米の荷札。下端折れ。他の事例からみて「五斗」と続いていたのであろう。(33)は調米の荷札の削屑で、長さ一六〇mm幅二二mm厚さ二mmを測る大型のもの。冒頭の「□□」は、従来「□八斗」と読まれていたが、そのように読むと荷札との理解が難しくなる。

(34)～(37)は郷または里から書き出す荷札。(34)は下端折れ、左辺割れ。「公子」の二文字は、従来「草」と読まれてきた。「公子並神」は調の貢進者名であろう。「廣面郷」は「和名抄」には見えないが、秋田市に近世初頭まで遡る地名「広面」が現存し、これにあたるとみられる。「九斗」は異例だが、調米の荷札か。(35)の「大田郷」は、出羽国出羽郡大田郷か。(36)は完形の荷札。「山方郷」は出羽国最上郡の郷名。品目部分の二文字目は米偏のみ残存し、「粳」などの可能性がある。「奉神」は神社へ貢進する物品であることを示すか。神祇祭祀に関わる木簡には、他に(40)(55)などがある。「五月」の上が「九年」であるとすれば、延暦の紀年銘木簡が多数共存していること(下限は(39)の延暦一四年)からみて、延暦九年の可能性が高い。(37)は、下端焼損。表面は、「吉弥侯里」(地名) + 「秦根」(人名) + 「二斗五」(貢進料)とも、また「吉弥侯里秦」(人名)、「根」(品

名) + 「二斗五」(貢進料)とも解釈できる。「吉弥侯里」の存在は知られず、「根」は海藻根の可能性が考えられるが、海藻根を斗量で量る事例はない。但し、海藻類を斗量で量る例はないわけではない。
 (38)は、「継」の右側が欠けている可能性があり、木簡の左辺は二次的整形ともみられる。貢進する稲の付札。裏面の人名は従来「男継」と読まれてきたもの。

(39)は、左辺上部に切り込みが残る。荷札木簡を用途不明の木製品に二次的に加工したもの。文字は、木簡上部は左端部分が僅かに残る。年紀部分は左半が残る。延暦一四年は七九五年。

(40)の「伊奈社」は不詳。(41)の「枚人」は名であろう。

(42)は、棒状の材を七面に面取りし、干支を一〇組ずつ記す干支棒木簡。文字の残りが悪く、釈読できない部分が多いが、第一面から第六面で完結し、第七面には再び第一面と同じ「甲子」から「癸酉」までが書かれていたと思われる。実際の字配りはかなりまちまちで、残りが悪いこともあって厳密な字配りの復原は困難であるため、積文は便宜干支ごとに二文字ずつ揃えて整列して示した。なお、第五面では、字配りからみて「己酉」「庚戌」「辛亥」「壬子」のいずれかを欠き、第六面でも一〇番目にあるべき「癸亥」の書かれる余地が残されていない。第一面から第三面には干支間に穿孔(貫通しない丸い凹み)があり、第一面では、一〇番目の干支の下にも穿孔がある。

(43)は、上端折れ、左右両辺割れ。従来「尾治部□山主」と釈読されてきたが、残画からみて「尾治部」とは釈読できない。(44)は、上端折れ。「大生」は「大壬生」に同じ。(45)は、下端折れ。左辺は割れか。(46)は、檜扇の骨の一本に墨書がある。(47)は、下端折れ。左右両辺はいずれも上部が割れ。(48)は、木簡を二次的に整形し、ヘラ状木製品に転用したもの。現状の上部三分の二ほどを細く削り出す。「王生マ」は「壬生マ」に同じ。(49)は、木簡を二次的に整形し、齋串に転用したもの。上端折れ。下端は尖らせる。表面三文字目は従来「佑」と釈読し、官司の構成を考える根拠としてきたものだが、釈読困難。

(50)は、上下両端二次的切断、左辺割れ、右辺削り。(51)は左辺削り、右辺割れ。従来これらは左右に接続すると考えられていたが、同材でその可能性は高いものの、直接は接続せず、間に別断片があったと考えられるため、別番号を与えることとした。

(52)の表面の「伊万志□□」は、従来「伊河志波万」と読んできた部分である。二文字目は「河」と釈読するには残画が少なく、むしろ「万」に近い。逆に五文字目の「万」は「河」でもよい。四文字目の「波」は不詳。裏面の「伊□□奴」は従来「伊和万始」と読んでいたが、このうち「始」は「奴」。二文字目の旁は「口」ではない。また従来の「止利河波志」のうち「河」はどちらかといえば「阿」に近い。

53、57は削屑。53は、上端が原形をとどめる。「田川郡」は出羽国田川郡。文字の大半が残り墨痕も比較的明瞭であるが、釈読できない。54は、上端が原形をとどめる。「置賜郡」は出羽国置賜郡。55は、右辺が原形をとどめるか。「奉神」は36にも見える。56の「米」は、従来「少丁」と釈読していた部分。57は習書であろう。「府」は符と通用する。

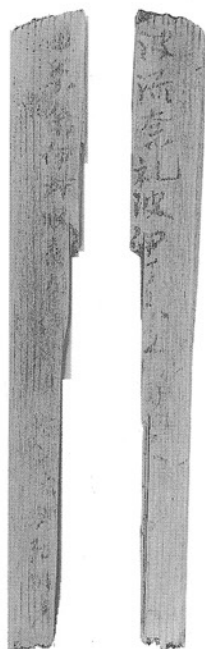
(小松正夫)



(10)
(赤外線画像)



(2)表(部分)
(赤外線画像)



(52)

文化財写真に携わる人の必携マニュアル 『埋文写真研究』一八号

埋蔵文化財写真技術研究会編

巻頭言

CTP工程の最新技術と校正方法

ネガタイプ入稿による白黒高品質印刷

赤外線撮影による遺構検出の試み

關鷄山古墳撮影

そこそこカメラマンをめざして

年輪年代学におけるデジタル画像技術の活用

背景紙の蛍光反応

黒崎 直
宮内康弘
中村 一郎
寿福 滋
井上直夫
富樫孝志
大河内隆之
井上直夫
他

在庫状況のお知らせ

頒価 一号、五号 品切れ、六号、八号 三五〇〇円

九号 三〇〇〇円 一〇号、一八号 三五〇〇円

送料 一冊、四冊 五〇〇円

五冊、一〇冊 一〇〇〇円 一冊以上 無料

ご注文は、埋蔵文化財写真技術研究会まで直接お申し込みください。ご送金は郵便振替でお願いします。

宛先 〒六三〇一八五七七 奈良市二条町二丁目九番一号

奈良文化財研究所気付 埋蔵文化財写真技術研究会

電話 〇七四二一三〇一六八三八

郵便振替 口座番号 〇一〇五〇一九九九三〇

ホームページ <http://www.maishaken.jp/>